

2022年3月11日発行

1990年代後半のオーディション番組とアイドル文化

——『ASAYAN』とモーニング娘。について——

塚 田 修 一

相模女子大学紀要 VOL.85 (2021年度)

1990年代後半のオーディション番組とアイドル文化

——『ASAYAN』とモーニング娘。について——

塚 田 修 一

A Study of Audition TV Shows and Girl Idol Culture in the Late 90s to the Early 2000s

Shuichi TSUKADA

This study aims to explore the development of audition TV shows in the late 90s to the early 2000s in Japan, focusing on their relationship with girl idol culture. “ASAYAN” (1995–2002, TV-Tokyo), a famous audition TV program in the late 90s, broadcast the usual situation of the principals as a reality show. The group Morning-Musume appeared on the program, at first performing as vocalists (not as idols) on the program, but they came to be regarded and admired as idols by the viewers and fans (*otaku*) on the Internet and electronic bulletin boards. As a result, they unintentionally became idols themselves.

Key Words : audition TV show, ASAYAN, girl idol culture, Morning-Musume, fan culture

1. はじめに

(1) 問題の所在

現在、オーディション番組が人気を博している。『PRODUCE101 JAPAN』(TBS) や『Nizi Project』(Huluほか)、『ラストアイドル』(テレビ朝日) など枚挙に暇がない。またJO1やNiziU、ラストアイドルなど、それぞれの番組からデビューしたアーティストやアイドルも多くのファンを集めている。これら現在のオーディション番組やアイドル文化を考察する時、そこには1990年代後半のオーディション番組『ASAYAN』(テレビ東京) と、そこで醸成されたアイドル文化からの影響を見てとることが出来る。本稿はこの『ASAYAN』が遺したものをめぐり試論である。

(2) オーディション番組とアイドルの関係

1970年代のアイドル(文化)を作ってきたのはオーディション番組『スター誕生!』(日本テレビ)であった。そのことを小川博司は次のように的確に指摘している。「視聴者は、普通の少年少女が毎週勝ち抜いて、チャンピオン大会でスカウトされるまでの経過を見せられることになる。視聴者は単に傍観者的に目撃するのではない。録画の会場にやって来た者は、会場で人気投票に参加することができるし、テレビの前の視聴者もスター誕生の過程に参加したような感覚をもつのである。テレビはアイドルを自己生産するシステムを作り上げた」(小川1991: 96)。実際、この番組で審査員を務めていた作詞家の阿久悠は、従来は偶像や崇拜される人や物という意味であるアイドルという言葉、実力はないが人

気の高い少年少女という意味にしてしまったのはテレビであることを指摘し、そのことの遠い原因が『スター誕生!』にあることを認めている。「テレビを通じての日常性のスターの発掘、新時代の自然な鮮度ということをもとめ、現象としては、美少女の低年齢化ということにつながり、それがどこかで混同して、低年齢の美少女とアイドルがイコールとなってしまったものようである」(阿久[1993] 2007:136)。このように、1970年代はテレビ番組、特にオーディション番組によってアイドルが作られる時代であった。

1980年代のアイドル文化において重要なオーディション番組は『夕やけニャンニャン』(フジテレビ)である。当番組の中に「君こそスターだ」というコーナーがあり、それは毎週5名のおニャン子志望の女の子が登場し、5日間にわたって水着審査を受けたり、プロモーションビデオを作ってもらったりしながら、最終日に視聴者と審査員の得点によって合否が決まる、というものであった(稲増1989:191)。しかし、このオーディションは「出来レース」であり¹⁾、「実際、歌が全くダメな子でも、インパクトのみで合格してしまう場合もあり、そうした子が次の週からはレギュラーとして番組に登場してしまうのである」(稲増1989:191)。すなわち、この『夕やけニャンニャン』内のオーディションでは、もはや出場者には『スター誕生!』で求められていたような歌唱力が必要とされてはならず、オーディションを名乗っていながらも、それは「出来レース」(=「公然のやらせ」)であったということである。しかし、受け手たちはその送り手のウソ(冗談)に「あえて」乗っかって楽しむのである(稲増1989)。このように、アイドルが虚構であることを隠そうとしない送り手と、虚構であることを割り切った上でそれを楽しむ受け手との共犯関係こそが、1980年代のアイドルシステムであった。そのシステムの象徴が『夕やけニャンニャン』内の「君こそスターだ」というオーディション——もはやオーディションとは呼べないのだが——であったと言えよう。

1990年代には、テレビの歌番組が相次いで終了し、女性アイドルの“冬の時代”が訪れる。しかし、90年代後半に、オーディション番組『ASAYAN』(テレビ東京)からモーニング娘。(以下、モー娘。)が誕生し、「国民的アイドルグループ」として人気を博していく。本稿が検討するのは、この90年代のオーディション番組『ASAYAN』とアイドル文化との関係である。以下、本稿では、『ASAYAN』の

概要とその展開について論じ(2章・3章)、『ASAYAN』から誕生した「アイドル」であるモー娘。について検討する(4章)。

2. 『ASAYAN』の概要

(1) 前身の『浅草橋ヤング洋品店』

『ASAYAN』の前身は、1992年に放送が開始された『浅草橋ヤング洋品店』(以下、『浅ヤン』)である。プロデューサーであった伊藤成人によれば、『浅ヤン』は、「日本のバブルがまさにはじける時代、まだバブリーなブランド全盛の時代に、『普通の人々の日常服のファッション番組を作ろう』と始まり、普段着の間屋街で有名な日本橋横山町の最寄駅である「浅草橋」に、死語である「ヤング」、「洋品店」を並べた、「時代の流行に対して、ゲリラ局らしいアンチテーゼの企画」であったという(伊藤2017:37)。総合演出を伊藤輝夫(テリー伊藤)が手がけた。

同番組の人気企画の一つが、「水戸黄門」シリーズである。その道の達人が身分を隠し(「黄門様として」)、一般人を欺く。たとえば世界的ファッションデザイナーである中野裕通が、「脱サラしてショップを開くためセンスを学ぶ男」や「さえないオジサン」に化け、浅草や錦糸町の洋服店や、ホスト、ゲイなどにファッション指南をしてくれるようお願い出る。また、中華料理の達人である周富徳が素性を隠し、町中華料理店で修行したりする。いずれも相手は偉そうな態度をとって中野や周を指導したりバカにしたりするが、最後に華々しく正体が明かされて驚愕する、という流れである(「浅ヤン」の強烈キャラにご用心!『ザ・テレビジョン』1993年2月19日号;「抱腹絶倒! 超過激“平成の水戸黄門”番組がバカ受け!『FLASH』1993年2月23日号)。

また、物議を醸した同番組の企画に「整形シンデレラ」がある。これは「整形後の女性が整形前の自分[の写真?]と会話し、『きれいになったね、おめでとう』と言われて泣く、という『トータル・リコール』風企画」であった(伊藤2017:161)。

これらの例から分かるように、『浅ヤン』は、面白い素人を発掘し、その素人を面白がる番組であった。その点において、同じテリー伊藤が演出に関わった『ねるとん紅鯨団』(フジテレビ)や『天才!たけしの元気が出るテレビ』(日本テレビ)と通底している²⁾。ただし、『浅ヤン』における「素人」の多用の背景には、テレビ東京の、予算がなく大物出演

者が使えなかったという事情があったという。「TXの長寿ヒット番組は、多くが大物タレントではなく、シロウトさんのパワーで成功した番組でした。普通の人のパワーは、どんなドラマの名優も及びません。商店街のおばあちゃんしかり、温泉の美人女将もしかり、YOUもしかり。大物を使えなかったゆえの、素人力のお宝大発見、でした」(伊藤2017:47)。

(2) 『ASAYAN』へのリニューアル

1995年10月に『浅ヤン』は『ASAYAN』へとリニューアルされ、オーディションバラエティーの色彩が濃くなる。『ASAYAN』がオーディション番組として広く知られるきっかけとなったのが、1995年10月のリニューアル時に新設された、小室哲哉プロデュースのボーカリストをオーディションで選抜する「コムロギャルソン」というコーナーであった(「夢のオーディション・バラエティ『ASAYAN』でとつぜんスターを探せ!」『ザ・テレビジョン』1997年3月14日:42-43;「これがオーディションの真実だ!」『JUNON』1998年2月号:59)。ここから、kaba、taeco、asamiの3人で結成されたdosや、天方直実、亜波根綾乃が輩出した。音楽系以外では、「三井のリハウス」CMに出演する女の子を選ぶ「CM美少女オーディション」が実施され、池脇千鶴が合格して芸能界デビューしている。

そして1998年2月の「ボーカリストオーディションファイナル」で優勝し、小室哲哉プロデュースによるCDデビューを飾ったのが鈴木あみ(現・鈴木亜美)であった。この「ボーカリストオーディションファイナル」において注目すべきは、最終審査に於いて、視聴者が「電話投票」という形で直接参加することができたことである。「PRODUCE101」などの現在のオーディション番組における「国民投票」のシステムに通じるものをここに認めることができる。さらに1999年2月には「男子ボーカリストオーディション」が開催された。このオーディションには後にEXILEのメンバーとなったATSUSHIやNESMITHが参加していた。最終的に川畑要と堂珍嘉邦が選ばれ、CHEMISTRYが結成された(「オーディション番組だからハマる!」『女性セブン』2020年8月20・27日号:117)。

ここまで概観してきたバラエティ番組としての『浅ヤン』と、オーディション番組としての『ASAYAN』に共通しているのは、いずれも「素人を芸能人にする」機能を果たしていることである。またそれは「テレ東的」であるとも言えるだろう。

太田省一が論じるように、「素人」は「テレビ東京らしさ」を形作っている重要な要素である(太田2019)。

3. リアリティショーとしての『ASAYAN』

(1) リアリティショー化するオーディション番組

『ASAYAN』の幾多のオーディション企画の中で特筆すべきは、シャ乱Qプロデュースによる、「女性ロックヴォーカリストオーディション」である。シャ乱Qのリーダー「はたけ」が中心となって、1997年4月から5ヶ月間にわたって同オーディションが行われた。同年7月には約1万人の応募者の中から最終候補者11名がお寺に集められ、4日間にわたる『怒涛のサバイバル合宿』が行われる。ダンスレッスンやボイストレーニングに加え、午前5時に起床しての朝のお勤め(読経)や掃除、自炊も課せられるハードなものであった。安倍なつみは、この合宿を振り返り、次のように述べている。「ダンスレッスンをやったスタジオがとにかく暑くて。そもそもダンスをやるのは初体験だったし。ついていくのがいっぱいいいっぱいで、つらかったです」(ASAYAN編1999:63)。

こうして彼女たちが必死になって努力する過程、あるいは「素」の表情を逐一カメラが追い、ドキュメントとして放送された。ただしそこには「演出」が働いていた。この合宿でダンスの指導を行った夏まゆみは、次のように書いている。「レッスンは一日三〜四時間。真夏の暑い時期だったが、わたしは冷房を切り、汗だくでレッスンを行った。冷房を使わないのはわたしの信念だが、番組制作サイドへの配慮もあった。合格めざして必死にレッスンに取り組む候補者たちというドラマチック仕立ての「絵、が、制作者サイドの求めていたものだったからだ」(夏2014:56)。先述の安倍が述懐していた「暑くてつらかったダンスレッスン」は、夏によって「演出」されていたのである³⁾。

ドキュメントでありながら「演出」が施されていること。それはリアリティショーである。リアリティショーとは、「一見ドキュメンタリーでありながら、そこに感動や笑いを生むための細心の仕掛けが施されている。視聴者は、その仕掛けの部分をわかったうえで事実と虚構の間のどちらつかずの部分を積極的に楽しむ」(太田2020a:14)ものである。「女性ロックヴォーカリストオーディション」には、『ASAYAN』の「リアリティショー化」という特

徴が顕れている⁴⁾。

このように、『ASAYAN』において、従来のオーディション番組のようにオーディション（審査）の場面（のみ）を映すのではなく、オーディションの過程をリアリティショーとして見せることは、「オーディション番組」史を考察する上で重要である。佐々木敦は、かつてのTVのオーディション番組が、どこかに隠れている「スターの卵」を見つけ出す、という「宝探し」「お姫様」探しであったと指摘したうえで、次のように論じる。「ところが『ASAYAN』に代表される現在のオーディションの機能とは、煎じ詰めれば単に『誰か』を選ぶ、チョイスするということであり、その『誰か』は特権的な存在として、来るべき時を待ちながらどこかに隠れていたわけではなく、場合によっては別の『誰か』、すなわち『あなた』でもあり得たのかもしれない、という可能性を常に含んでいる、少なくともそう示唆されているのだ」(佐々木2005:211)。そしてそのことは、次のような帰結をもたらす。「特別な存在としての『お姫様』があり得ないのなら、まず任意の『誰か』を（ある意味では適当に）設定し、その『誰か』が、幾多の障害に見舞われながらも、立派な『アイドル』へと成長を遂げていくという『物語』をプレゼンテーションしていこうというものである。こうしてオーディションの経緯と『その後』の顛末を、リアルタイムのドキュメンタリーとしてショー化し、視聴者に感情移入させていくという『ASAYAN』の方法論が編み出された」(佐々木2005:212)。

佐々木のいう、「オーディションの経緯と『その後』の顛末を、リアルタイムのドキュメンタリーとしてショー化」することこそが、すでに確認した「リアリティショー化」に他ならない。『ASAYAN』のリアリティショー化は、「オーディション番組」自体の変質を示すものでもあった。

(2) モーニング娘。の誕生

「女性ロックヴォーカリストオーディション」は、最終的に平家みちよがグランプリを勝ち取る。「この番組は最初そこで終わる予定でした。ところが、オーディションの最終選考で落ちた10名の中にも、僅差で落ちた磨けば光そうなコがいるわけです。それで今度はその中から5人のコたちを選んで、僕[つく]にプロデュースしないかと話が持ち上がったのです。『モーニング娘。』というグループ名を付けたのはその時です」(『モーニング娘。』に見

る変革ビジネス』『無限大』No.118:43)。

いわば「敗者復活組」であるモーニング娘。5人には、メジャーデビューの条件として、5日間でインディーズシングル『愛の種』5万枚を手売りするという試練が課せられた。ナゴヤ球場で見事5万枚を売り切り、メジャーデビューが決定した彼女たちには、デビュー曲のメインパートを誰が歌うのかをメンバー間で競い合う、『怒涛のデビュー曲大争奪戦』が課せられた⁵⁾。『ASAYAN』のプロデューサーであった佐藤哲也は、次のように述べている。「5人のうち誰がメインパートを歌うのか競うことで、なあなあに陥らない良い緊張感が維持されました。その後、メンバーが8人に増えて、メインパート争奪戦はますます熾烈になりつつも、共にしのぎを削ることでうわべだけではない連帯感も生まれました」(『ダカーポ』1998年11月4日:53)。さらに、メンバーの突然の増員(1998年3月)や鈴木あみとのシングル同日発売対決(1999年7月)など、『ASAYAN』では、モー娘。に様々な試練や難題、サプライズを課し、メンバーが必死になったり、涙を流したり、苦悩したり、時には呆然とする様子をリアリティショーとして放送していったのである⁶⁾。当時の『ASAYAN』の熱心な視聴者であった朝井リョウは次のように記している。

オーディション番組「ASAYAN」を、一九九〇年代末当時私は食い入るように観ていた。(中略)当時「モーニング娘。」は、メジャーデビュー候補曲のパート割を決めるためのレコーディングに臨んでいた。オーディション時から注目を集めていた安倍なつみはセンター候補として最も有力だったが、彼女にとっての勝負曲「モーニングコーヒー」のレコーディングを終えたあと、ひとり涙を流す。そして、同期かつライバルでもある石黒彩を、柵越しに睨むようにしながら、彼女はこう呟くのだ。「あやっぺ(石黒彩)がうまく歌っていた」自分ではないメンバーが褒められていたこと、自分の歌うパートが一文字でも減らされるかもしれない予感、歌いたいという我欲に何かしらのブレーキがかかりそうになったことに、彼女は涙を流したのだ。誰のためでもない、百パーセント、自分のための涙。小学生だった私は、この姿にガツンとやられてしまったのだ。(『大切なことはすべてASAYANが教えてくれた』『IN・POCKET』2014年7月:33-34)

(3) 意図せざる結果としてのアイドル

ここまで、「オーディション番組」としての『ASAYAN』（の変節）を確認し、モー娘。の誕生を見てきた。しかし、ここで重大な疑問が生じる。『ASAYAN』が生んだこのモー娘。は、果たして「アイドル」なのであろうか——。繰り返しになるが、モー娘。はそもそも「女性ロックヴォーカリスト」のオーディション参加者で結成されている。実際、番組も彼女たちを「アイドル」として扱っていない（ASAYAN編1999）。プロデューサーであるつんく♂自身、モー娘。をアイドルグループとしては考えていなかった。

僕が思い描いていたモーニング娘。プロデュースのあり方は、『歌も芝居もそこそこできるアイドル』ではありませんでした。あくまで『歌手』として女の子を育て上げる、そして音楽を軸に踊りも衣装もすべてフルプロデュースすることでした（つんく♂2010:127）。

また、つんく♂は自身がかつてアイドルファンであったという経験を持ちながらも、次のように述べている。

決して「あのときのアイドルがこんなふうだったから、モーニング娘。もこうしよう、っていう視点で考えることはないです。だって、アイドルって、基本的には「失敗、してる人たちがほとんどなんですよ。ものすごいビッグ・スターを抜かしては、で、アイドル・ファンっていうのは、どこかその「失敗、を楽しむというか……」（能地2002:146）。

するとモー娘。は、意図せざる結果として「アイドル」となったということになる⁷⁾。それでは、いかにしてモー娘。は「アイドル」となったのか——。送り手にその意図がなかったとすれば、着目すべきは受け手——ヲタクたち——であろう。本稿の結論を先取りしてしまえば、ヲタクたちこそが、モー娘。を「アイドル」として受容し、モー娘。を「アイドル」たらしめたのである。

4. ヲタクたちの『ASAYAN』とモー娘。受容

(1) アイドルを「遊ぶ」ことの系譜

ここで、「アイドル」についての定義が必要であろう。小川博司は、先にも引用した論考において、アイドル歌手を「子どもや青少年に、身近な『仲間』として意識され、人気を集める少年・少女歌手のこと」と定義し、アイドル（文化）の展開をテレビメディアとの関連を主軸として整理している（小川1991）。小川は、1959年～のプレ・アイドル期、1971年～のアイドル全盛期（前期）、1980年～のアイドル全盛期（後期）、1990年～のポスト・アイドル期に区分し、論を進めているが、1991年の論考であるため、本稿が対象としている90年代のアイドル（文化）については論が十分に及んでいない。90年代のいわゆる女性アイドル“冬の時代”以降のアイドルを考察するには、更なる定義が必要であろう⁸⁾。本稿では、90年代以降の「アイドル」を、「オ（ヲ）タクが自由に遊べるもの」と定義してみたい。「アイドル」かそうでないかを規定するのは、オ（ヲ）タクが遊べるか否か、ということになる。さらに言えば、オ（ヲ）タクこそが「アイドル」かそうでないかを決めているのである。そしてオタクたちがアイドルを自由に遊びはじめたのが、この90年代であった。

この時代のアイドルオタクたちの「遊び」は、たとえばアイドルグループ制服向上委員会（SKi）のオタクたちの様子から窺い知ることができる。彼らは人の道を外れたオタクである、ということで「外道」と呼ばれていた（金井1996）。SKiのコンサート中の彼ら「外道」の様子は、「じっとステージを凝視する者、ステージの状況を必死にメモする者、ステージの上のメンバーの振り付けをまねする者、とにかく叫ぶ者などいずれも奇行ぞろい」と描写され、「コンサートの日以外にも休日となれば事務所の前や前もって調べたお気に入りのメンバーの家などの前で張り込みをする者も少なくない」という（「外道、という生き方」『Quick Japan』Vol.6:179）。またある雑誌記事には、イベントで客席から電光掲示板を使ってアイドルにメッセージを送る「電光掲示板男」や、コンサート会場の後方で踊ったり、アイドルの振り付けを真似する「踊り隊」、仲間とともに毎回のコンサート内容の情報を逐一パソコン通信やインターネットで流す「パソ通情報発信男」などさまざまな「外道」が紹介されている（「謎の

「プレ・アイドル、愛好者たち」『SPA!』1996年5月29日)。このように「外道」たちは思い思いの方法で、SKiというアイドルを「遊んで」いたのである。ただし、「外道」という呼称が示唆する通り、その存在は世間から見ればマイナーで、かつアブノーマルなものであった。

(2) モーヲタたちの「遊び」

モー娘。のオタクたちは、こう言ってよければ、なりふり構わずモー娘。を「遊ぶ」。彼らはモーヲタと呼ばれていくことになる。「モーヲタ」とは、「ポジティブかつアクティブに、モーニング娘。を楽しみ、遊ぶ人たちのことを指す」(『ダカーポ』484号・2002年2月6日:51)。彼らは、夜通しモーニング娘。の楽曲を爆音でかけまくり、「サイリウム片手に大人の男たちが踊り狂う、まさに雑多なカオス状態」の『爆音娘。』なるイベントに興じたり、とめどもないモー娘。をネタにしたトークや、モー娘。が出演した映画などの撮影現場を訪問したビデオを見て盛り上がるトークイベントを開催し、また参加する⁹⁾。そして、インターネットのサイトでモー娘。について語り合い、モー娘。のメンバーを登場人物にした妄想小説を書いたりするのである(『ダカーポ』484号・2002年2月6日:「いい年して[モーヲタ]たちのなんと膨大な理屈」『SPA!』2001年12月19日:38)。

こうしたモーヲタたちの「遊び」の代表が、「ヲタ芸」であろう。ヲタ芸は、1980年代の親衛隊文化から先述の「外道」へとひそかに受け継がれていたものであるが、モーヲタたちによって全面開花していく(難波2020)。「このヲタ芸、もともとは、ライブ会場における後部立ち見席など、いわゆる「クソ席、から起こった現象である。『どうせ娘。たちの顔もよくわからないんだし、好きなように踊っちゃえ!』といったヤケクソのパワーが、その原点にあったのだ」(「モー娘。好きなら一度は踊れ!! 謎の伝統芸「ヲタ芸、とは?」『サイゾー』2005年12月:86)。実際、ヲタ芸の基本技の一つである「OAD(オーバー・アクション・ドルフィン)」——「ウリヤッホイウリヤッホイ!!」のかけ声と共に、左右交互に体を大きく開きながら手拍子を打つ——は、モー娘。のセカンドシングル『サマーナイトタウン』の振り付け“ドルフィン”が由来となっている(「モー娘。好きなら一度は踊れ!! 謎の伝統芸「ヲタ芸、とは?」『サイゾー』2005年12月:86)。そしてヲタ芸は、インターネットなどを通じてモー

ヲタたちの間に伝播していった。「モー娘。はネット普及率が高まり始めた頃だから、情報の共有もものすごい速さで進んだしね。ネット文化とのシンクロは欠かせない要素で、ヲタ芸的なノリが共通認識になったのもこの頃でしょう」(「大ブレイク中! [ヲタ芸] 大研究」『SPA!』2007年2月20日:79)。

(3) モーヲタたちの能動性

モーヲタたちのモー娘。文化の受容を特徴づけているのは、先の引用にもあるように、インターネットを使った能動性である。ヲタクたちは、モー娘。結成の早い時期から、ホームページ(ファンサイト)を自作して、応援していった。つくろもそれを認識していたようである。「そのうち自分の応援するコを勝ち残させるために、自分たちのホームページを使って自分の推してるコの情報を公開したりし始めたんです」(『モーニング娘。』に見る変革ビジネス』『無限大』No.118:43)。同様に、『ASAYAN』プロデューサーの佐藤哲也も、雑誌のインタビューで次のように発言している。

佐藤「『モーニング娘。』のね、ホームページを勝手に作っちゃった人がいて……」

——画像を無断で使用するのは肖像権違反ですよ
ね?

佐藤「そうなんです。まあ、そういう方々に支えられているわけですけどね……」(『週刊女性』1998年8月4日号:70)

実際にファンサイトを立ち上げ、運営していたヲタクのインタビューを参照しておこう。

5期メンバーが入ったときなんで01年の夏ですね、『娘。楽宴』ってサイトを作って。当時、ハロプロってオフィシャルサイトがなかったんですよ。『ASAYAN』サイトが半オフィシャルみたいな感じで。あと老舗の『グッドモーニング』っていうファンサイトがあったけど、もうちょっと自由にやれるものを作りたいなと思って。

——基本、ネットでは2ちゃんねるぐらいしかヲタの居場所がなかった時代ですよ。

そう、2ちゃんとモーニング娘。の歴史ってほぼ一緒なんです。あっちはえげつないとか悪口がメインだったから、どっちかという純ファンサイトみたいなものを作りたい。僕が作った『娘。楽宴』はトップページにニュースを載せ

てたんですけど、誰よりも早くそこにニュースを載せたいっていう使命感があって、そのうちタレコミ屋が出てきて、それが新聞を刷る人たち。

——なるほど。

一番早いんですね。その人が匿名でメールをくれるようになって、それをトップページに載せてたんですよ（笑）。（中略）だから、「『娘。楽宴』すげえ！」みたいになって。最初は「こんなの載せてホントか？」って言うてるんだけど、翌朝になるとそれが発表されて。結果、当時の娘のファンサイトのなかではナンバーワンになって。僕は2ちゃんねるが敵っていうスタンスだったんです。2ちゃんねるvsファンサイト。そのファンサイトの代表が『娘。楽宴』で、2ちゃんねるの人たちもマジヲタをバカにしてるスタンスだったんで、やりあうみたいな感じでしたね。（『BUBKA』2021年5月号：79-80）

このインタビューに登場するサイトの他にも、多様なファンサイトが開設されていた¹⁰⁾。

このように、能動的な受け手（モーヲタ）たちは、インターネットというメディアを使ってモー娘。を「遊んだ」のである。かくして、当初は「ヴォーカリスト」であったモー娘。は、「アイドル」となったのである。

(4) モーヲタたちのロマン主義とシニシズム

このモーヲタたちは、どのように『ASAYAN』（およびモー娘。）を受容していたのであろうか。彼らの受容の仕方は、たとえば1980年代のおニャン子クラブの受容——送り手のウソ（冗談）に「あえて」乗っかってみせる（稲増1989）——とは、異質のものである。

彼らはまず、『ASAYAN』で提示される物語を、きわめてベタに受容し、感動するのである。そのことは、あるモーヲタが書いた文章に次のように表現されている。

雨あられと降りかかる難問に体当たりで挑み、傷だらけになるモー娘。たち。窮地に陥った彼女たちへ向かってブラウン管を通して声援を、念を、愛を送る。「頑張れ！」。そんな声援に応えるかのように彼女たちは苦境を何とか乗り越える。当時、息を飲んで娘。たちを見ていた者たちには、眩暈をもたらす共通感覚のようなものがあつたに違いない。それはまるでひな鳥が見事な成鳥になって

いく過程を早回しの記録フィルムで見るとような感覚。美少女たちの涙がもたらす不安と恍惚。（『Quick Japan』Vol.49：66）

また彼らは、『ASAYAN』で「演出」されることをベタに受け取り、それに腹を立てたりもする。あるモーヲタはインタビューで次のように語っている。

後藤 [真希] にハマってからですね、狂っていったのは。最初は後藤が嫌いだったんですよ。『ASAYAN』でも明らかにヒール的な扱いだったじゃないですか。入ったときも楽屋で居眠りしてたり、「[先輩メンバー矢口真里の手書きの名前を見て] 知って誰ですか？」っていうのが決定的で……。 （中略）知らないで入ってきやがってと思って最初は嫌いだったんですね。それで『LOVEセンチュリー』を観たらダンスとかすごいし、ひとりだけオーラが違ったんですよ。（中略）後に後藤ヲタの人とも仲良くなっていくんですけど、話を聞くと最初は『ASAYAN』を観て後藤が大嫌いだったっていう人が多いんですよ。そこからステージを観て好きになるっていう。平気な顔してステージにいるけど裏ですごい努力してる人だっていうのが後々わかって、それでみんな好きになっちゃうんですね。」（『BUBKA』2021年8月号：79、下線引用者）

前章での議論からも分かるように、『ASAYAN』での後藤の「ヒール的な扱い」は、明らかに「演出」であろう（実際、後藤は矢口のことを知らなかったわけではない）。だがヲタクたちはそれをベタに受け取り、後藤を嫌ったのである。このような、いわばロマン主義的な態度が、モーヲタたちの『ASAYAN』受容の特徴である。

しかし、ヲタクたちの『ASAYAN』（とモー娘。）の受容は、そうしたロマン主義的なものだけではなく、彼らは、『ASAYAN』を見ては深読みをし、その背後にある（であろう）スタッフや事務所の意図、メンバーの関係性などをあれこれシニカルに考察する。その主な舞台となったのが匿名掲示板の2ちゃんねるであった。2001年に『ASAYAN』でモーニング娘。関連の企画が放送されなくなると、その動きは加速していく¹¹⁾。

WEBで発表された情報がたった半日であらゆる可能性を検討され消費されていく恐ろしい速度の

世界。正式発表ならまだしも、ほんの一時間ほどWEB上にアップされた誤記、誤発表でさえも裏から解読し、新たな意味を付与し、消化・消費していく情報のジャバ・ザ・ハットたち。この場合、所属事務所のやり方を、あまりスマートとは言えない口調で批判することが基本的なスタイルのようだ。(『Quick Japan』Vol.49:68)

あるヲタクはモー娘。が出演する番組での彼女たちの言動に目を光らせ、その背後にあるであろう「大人の事情」についてたとえば次のように思いを巡らす。「市井紗耶香が復帰して、中澤裕子と2人でテレビ出演していたんだけど、歌の間中、2人は結局一度も目を合わせなかった。ここから市井の復帰をめぐる大人の事情についていろいろ読み取れる」(「いい年して [モーヲタ] たちのなんと膨大な理屈」『SPA!』2001年12月19日:41)。

こうした(メタな)シニシズムと、先述の(ベタな)ロマン主義的態度とが同居する形で、ヲタクたちは『ASAYAN』およびモー娘。を受容したのである¹²⁾。

5. おわりに

(1) オーディション番組としての『ASAYAN』

本稿で論じてきたことをまとめておこう。オーディション番組『ASAYAN』の変遷を辿りながら見出したのは、オーディション番組のリアリティーショー化という事態であった。そこでは、従来のオーディション番組のようにオーディション審査の場面が映し出されるのではなく、出演者たちが必死になって努力する過程やその「素」の表情を逐一カメラが追い、ドキュメントとして放送される。ただしそこには何かしらの「演出」が働いている。このように、オーディション番組が「一見ドキュメンタリーでありながら、そこに感動や笑いを生むための細心の仕掛けが施されている」リアリティーショーとなったのがこの『ASAYAN』であった。このリアリティーショーとしてのオーディション番組という形式は、現在でも『ラストアイドル』(2017年～、テレビ朝日)や『Nizi Project』などに継承されているのを見ることができる。『ASAYAN』と『ラストアイドル』両番組の構成を手がけた鮫肌文殊は、『ASAYAN』の「リアリティーショー」的な演出について、次のように発言している。「アイドルだって同じ人間だから苦悩や葛藤があるんだよと。一人

ひとり背負っている物語があるから視聴者は共感してくれると思うんです。当時はその見せ方が新しかったんでしょね。現場で予期しないことばかり起きたけど、そんなハプニングにテレビ屋の反射神経で瞬時に対応していくことがオーディションバラエティの面白さだと思います。『ラストアイドル』もそうです」(「オーディション番組というドキュメント」『EX大衆』2018年6月号:29)。

このリアリティーショー化したオーディション番組『ASAYAN』の特質を、「人間の業の肯定」と表現してみたい。「人間の業の肯定」とは、立川談志が落語の本質として述べたものである¹³⁾(立川1985)。『ASAYAN』では、出演者が他の出演者への嫉妬を剥き出しにし、自分が思うようにパフォーマンス出来なかったこと——朝井リョウの言葉を借りれば「我欲にストップがかかりそうになる」こと——に悔し涙を流す。それは人間の業である。だが、それで良いのだ。つんく♂の発言を引用しておこう。

僕が『ASAYAN』の中でメンバーを決める時、世間や友達にこう見られたいと思っているその先の本音、ちょっとずるい心、誰かを踏み倒してでも目立ちたいという煩惱のようなものが見えたら、きっとその子は愛されるだろうなと思ったんです。だから、メンバーの心が見えるところまでカメラに追いかけてもらい、結果、その子たちの本当の「清纯、が見えたから、視聴者も応援したんだと思います。過去のアイドルのような、大人がつくった「清纯、ではなかったからです。(『別冊カドカワ Scene03』:67)

(2) アイドル文化と『ASAYAN』

また本稿は、当初は「ヴォーカリスト」であったモー娘。が、モーヲタたちの自由な「遊び」——爆音で踊ったり、ヲタ芸を打ったり、妄想を語ったり、2ちゃんねる上で深読みする——によって、送り手が意図しない結果として「アイドル」となったことを明らかにした。モーヲタたちが「遊ぶ」雰囲気や、モーヲタの一人は次のように回想している。

90年代の「アイドル冬の時代」が終わったという高揚感もあっただろうし、インターネットの黎明期だったのもあって、それ[モー娘。関連のあれこれ]を語り合える楽しさがあったんじゃないですかね。市井復活祭で1ヶ月毎晩飲むとか、昔のアイドルシーンにはなかった気がするんですよ。

モーニング娘。の横アリのビッグマッチのあとなんて飲み会50人とか超えて、店全部モーヲタしかいないみたいな感じで。(中略) 大学生も無職もみんな語り合う、毎日がお祭りみたいな楽しさがありましたね。(吉田2021:42)

このように、モーニング娘。を「アイドル」たらしめた、モーヲタたちの能動的な営みは、「参加型文化」として把握することができる。Jenkinsは、ファンをはじめとする消費者が、新しいコンテンツの創造と流通に積極的に参加する文化を「参加型文化 (Participatory Culture)」として論じ、そこでの新しい消費者を次のように記述している。「もしも、かつての消費者が受動的だとみなされていたのであれば、新しい消費者は能動的である。もしも、かつての消費者は予測可能で「そこにいて」と言われたところにとどまっていたのなら、新しい消費者は放浪するし、ネットワークやメディアへの忠誠心の低下も示している。もしも、かつての消費者が孤立した個人であったのなら、新しい消費者はもっと社会的につながっている」(Jenkins 2008 = 2021:50)。さまざまなメディアを横断し、時にロマン主義的態度で、また時にはシニカルな態度で、能動的にモー娘。というアイドルを「遊ぶ」モーヲタたちは、「参加型文化」における「新しい消費者」と言える。

2001年に『ASAYAN』内でモー娘。関連の情報は放送されなくなり¹⁴⁾、2002年3月に当番組は放送を終了する。だが、この「新しい消費者」たちが能動的にアイドルを「遊ぶ」営みは、モーヲタのみならず、たとえばAKB 48 (2005年デビュー) のファン・オタクたちによっても担われていくことになる¹⁵⁾。

註

- 1) 実際、『夕やけニャンニャン』のチーフ・ディレクターであった笠井一二は、稲増龍夫によるインタビューで次のように答えている。
 稲増 おニャン子のオーディションというのは、あれは出来レースだったんですか。
 笠井 僕らは独自で決めていましたから。
 稲増 一応、視聴者の評価が入りますね。
 笠井 それを参考にして全部自分で決めていました。こういう子がいないからこういう子を選ぶとか。美形がほしいから美形は

どうかとか。たとえば、河合その子が卒業したら、河合その子みたいな子を二人入れるとか。(稲増1989:192-193)

- 2) 実際、テリー伊藤は次のように書いている。「ビートたけし、とんねるず、ダウタウン。皆さん、お笑いバラエティ番組は、こういうタレントたちによって成り立っているとお思いでしょう。でも、実はそうじゃありません。最近、素人の方々が番組を支えているのです。私が手がけた『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』『ねるとん紅鯨団』、『浅草橋ヤング洋品店』にしても、実際タレントはナビゲーターに過ぎないんです。これだけTVのチャンネルがあって、しかもサイクルが早いと、タレントのパワーだけで見せる、演出で見せるというのは不可能に近いんです。今のバラエティはいわば「合気道」。素人の力をうまく利用して、それに演出を加味して番組を作っていく。悲しいかな、それがバラエティ番組の主流なのです。」(「素人参加オーディション、こんな人が応募します」『CREA』1994年5月号:81)
- 3) 夏は、控室で後藤真希が涙を流すと、急いで撮影スタッフを呼び、後藤が泣いている「画」を撮らせることもしていた(夏2014)。
- 4) なお、同時期の『ASAYAN』では、オーディション関連以外でも、リアリティショー的な企画を放送していた。たとえば、「再起にかける芸能人」という企画は、元WINKの鈴木早智子など、芸能界再チャレンジを目指す5名を小室哲哉がプロデュースするというものであったが、そのためにニューヨークで特訓したりとさんざん引っ張った挙げ句、企画自体が白紙に戻される。稲増龍夫は、「番組的にいえば、恐らく、再起劇の盛り上がりを作り出すための演出なのだろうが、それにしても、ここまで平気で人の人生をもてあそぶのは、いくらバラエティといえ残酷な話である」(『週刊ポスト』1998年10月9日:63)と評している。
- 5) メンバー間の競争を煽る「演出」について、安倍なつみは次のように述懐している。「最初は、ギスギスしたこともありますよ。特に、デビュー前後の『ASAYAN』のころって、`誰vs誰、とか、`誰々に立ち向かう誰、とか。毎週、そういう感じになって、当然、自分たちでもオンエアを見ますよね。そうすると、元々自分の中にあつた以上のライバル心みたいなものが

- 育っていったり。それで、相手を受け入れられない気持ちになっちゃったときもありましたけど。](能地2002:34)
- 6) モー娘。に課せられた試練については、「これがオーディションの真実だ!」『JUNON』1998年12月号:57-58に詳しい。
- 7) 実際、つくく♂は次のように書いている。「今、『モーニング娘。』は世間でアイドルと言われている。意図した結果ではないが、売れた結果としての評価だからいいと思うことにしている。しかし、バブル期だったら、間違いなく、僕のプロデュースする子も僕も売れなかつたらう。僕らの魅力は“炬燵の上のみかんのような優しさ”だから、不景気の時代にしか受けないんじゃないかな」(「アイドルになった『モーニング娘。』」『文藝春秋』2000年3月特別号:87)。
- 8) アイドル“冬の時代”を検討したものとして、塚田(2012);太田(2020b)がある。
- 9) 剣(2014)には、筆者がこうしたトークイベントに足を運び、ヲタク仲間と交流を始める様子が描かれている。
- 10) たとえば、ネット娘。連合(2002)や娘。ネットワーク(2002)、娘。NET(2002a;2002b;2002c)の巻末には、ファンサイトが数多く掲載されている。
- 11) かつてモーヲタであった宇多丸は、次のように述べている。「あと『ASAYAN』が終わっちゃったのとインターネットのちょうどいい普及感、2ちゃんのなちよっとアングラ感のある普及度と、じゃあ俺たちが物語を紡ぐっていうのと食い合わせがよかったのかなと思うんですよ。僕自身は2ちゃんの住人じゃないけど、切り離せないものがあつた感じがしますね。」(吉田2021:268)
- 12) 「ロマン主義とシニシズムの同居」については、北田暁大の2ちゃんねる論(北田2005)から着想を得ている。
- 13) 「私にとって落語とは、`人間の業、を肯定しているところにあります。`人間の業、の肯定とは、非常に抽象的ないい方ですが、具体的にいいますと、人間、本当に眠くなると、`寝ちまうものなんだ、`といっているのです。分別のある大の大人が若い娘に惚れ、メロメロになることもよくあるし、飲んではいけないと解っていないながら酒を飲み、`これだけはしてはいけない、`ということをやってしまうものが、人間なのであります。」(立川1985:17)
- 14) 『ASAYAN』におけるモー娘。関連の企画の放送については、『別冊宝島608 モーニング娘。バイブル 知りたいこと、全部。』に詳しい。
- 15) その営みの一端は、たとえば『48現象』(2007年、ワニブックス)に見ることができる。

付記

本稿は、放送文化基金による2020年度助成（課題名「アイドルオーディション番組の総合的研究～歴史的、メディア論的、比較文化論的視点から」、アイドル文化研究会）の成果の一部である。

参考文献

- 阿久悠、[1993] 2007、『夢を食った男たち—「スター誕生」と歌謡曲黄金の70年代—』文春文庫。
ASAYAN編、1999、『モーニング娘。5+3-1』宝島社。
稲増龍夫、1989、『アイドル工学』筑摩書房。
伊藤成人、2017、『テレ東流 ハンデを武器にする極意』岩波書店。
Jenkins, Henry, 2008, *Convergence Culture : Where Old and New Media Collide.* (渡部宏樹・北村紗衣・阿部康人訳、2021、『コンヴァージェンス・カルチャー』晶文社.)
金井覚、1996、『アイドルバビロン』太田出版。
北田暁大、2005、『嗚う日本の「ナショナルリズム」』NHK出版。
娘。NET、2002a、『ファンによるファンのためのモーニング娘。Ⅲ 後藤真希卒業文集 やるしかない!』コスミックインターナショナル。
——、2002b、『ファンによるファンのためのモーニング娘。Ⅳ タンポポ』コスミックインターナショナル。
——、2002c、『ファンによるファンのためのモーニング娘。Ⅴ プッチモニ宣言』コスミックインターナショナル。
娘。ネットワーク、2002、『ファンによるファンのためのモーニング娘。Ⅱ』コスミックインターナショナル。
難波功士、2020、「アイドルを声援することの系譜学」丹羽典生編著『応援の人類学』青弓社。
夏まゆみ、2014、『ダンスの力』学研。
ネット娘。連合、2002、『ファンによるファンのためのモーニング娘。』コスミックインターナショナル。
能地祐子、2002、『モーニング娘。×つんく♂』ソニー・マガジズ。
小川博司、1991、「アイドル歌手の誕生と変容」藤井知昭・高橋昭弘編『民族音楽叢書10 現代と音楽』東京書籍。
太田省一、2019、『攻めてるテレ東、愛されるテレ東』東京大学出版会。

- 、2020a、「日本におけるリアリティショーの歴史と現状」『GALAC』2020年12月。
——、2020b、『平成アイドル水滸伝』双葉社。
佐々木敦、2005、『ソフトアンドハード』太田出版。
立川談志、1985、『あなたも落語家になれる』三一書房。
塚田修一、2012、「彼女たちの憂鬱——女性アイドル“冬の時代”再考」鈴木智之・西田善行編著『失われざる十年の記憶』青弓社。
つんく♂、2010、『「口説く」人は必ず心を開く』青志社。
剣樹人、2014、『あの頃。男子かしまし物語』イースト・プレス。
吉田豪、2021、『証言モータ～彼らが熱く狂っていた時代～』白夜書房。

